「皇帝への税金」　2023年10月25日

イエスは彼らのたくらみを見抜いて言われた。「デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、誰の肖像と銘があるか。」彼らが「皇帝のものです」と言うと、イエスは言われた。「それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは民衆の前でイエスの言葉尻を捕えることができず、その答えに驚いて黙ってしまった。（ルカ20：23～26）

エルサレム神殿当局は何としても、主イエスを陥れたく、機会を狙っていた。「正しい人を装う回し者」を遣わし、主イエスの言葉尻を捕え、ローマの総督か、神殿当局に引き渡そうと目論んだ。「正しい人を装う回し者」はマルコ、マタイ福音書では、ファリサイ派の人々とヘロデ党の者たちであったと書いている。ファリサイ派の人々はモーセの十戒を基礎にした律法体系をイスラエル人が遵守すべき戒律とし、民衆に教える宗教集団である。彼らはイスラエルの伝統を誇る愛国主義者である。ヘロデ党はローマによる政治支配を受け入れ、親ローマに立つ現実的な政治集団である。ファリサイ派とヘロデ党は思想、立場が対立し、日ごろは憎しみ合う敵対関係にあったが、主イエスを陥れるために、共同戦線を組んだということである。著者ルカは「正しい人を装う回し者」と書いているが、議論の展開から、回し者らは「ファリサイ派の人々」と「ヘロデ党の者たち」であったと思われる。彼らは主イエスの所に来て、「先生、私たちは、あなたが語り、教えておられることが正しく、また、分け隔てをせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています」と挨拶した。最高の敬意を込めた、礼儀正しい挨拶である。彼らは続いて、「ところで、私たちは皇帝に税金を納めるのは許されているでしょうか、いないでしょうか」と尋ねた。この問いには「諸刃の剣」が仕掛けられていた。もし「納めなさい」と答えれば、ファリサイ派の人々からローマに媚びる腰砕けと言われ、ローマへの納税に反対している民衆の反感を買い、神殿当局に通報すれば、ユダヤへの愛国心を持たない者として烙印される。逆に「納めなくてもよい」と答えれば、ローマに反逆する政治犯として、訴えられる。「イエス」とも「ノー」とも答えられない問いであった。この自信が最初の慇懃な挨拶になっていたのである。主イエスは彼らのたくらみを見抜いておられた。例によって、直接に答えず、「デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、誰の肖像と銘があるか」と逆に問いを出された。ローマの貨幣デナリオンにはローマ皇帝ティベリウスの肖像と銘が刻まれていた。彼らは「皇帝のものです」と答えた。主イエスは、「それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言われた。「皇帝のものは皇帝に返す」は、皇帝税を納めなさいと聞こえる。「神のものは神に返しなさい」と言われた「神のもの」とは「神への信仰」で、それは神に献げよと捉えられる。そうすると、政治と宗教の分離、即ち「信教の自由」を説いたということになる。現代人には分かり易い解釈であるが、主イエスが言われた意図ではないだろう。「神のもの」とは、エルサレム神殿に献げる神殿税のことである。ヘロデ党はローマへの「皇帝税」を強要し、ファリサイ派は「神殿税」を強要していた。主イエスは、自分たちに都合のよい税を民衆に強要する両者に、納税問題について問う資格があるのかと、彼ら自身の主体性を問う返答を投げ返された。彼らは言葉尻を捕らえることができず、黙して、身を引かざるを得なかった。